

第47回法廷だより

2025年12月26日、控訴審第8回期日が札幌高裁で開かれました。

大雪の下 傍聴席は満席で、超過した人員が原告席に座るほどでした

2025年12月26日午後2時30分より札幌高裁で、第8回口頭弁論期日が開かれました。傍聴席は満席で、あふれた人が原告席に着席しなければならぬほどでした。

期日では、一審原告、一審被告が、それぞれ以下の書面を提出しました。

1 一審原告は、近郊居住の原告において、泊原発が8300億円もかけて維持され、燃料も敷地内に残されたままであり、客観的、物理的にはいつでも再稼働させることができる状態であり、再稼働させる可能性がある。そうした中で、現時点で防潮堤が存在せず、将来建設される防潮堤も具体的危険性を減少させることには結びつかないものであることから、防潮堤の完成や原発再稼働の可能性は、具体的危険に関連性があるが、一審被告において原発を再稼働させる意思があるかないかという点、具体的危険性の有無と関連し



否定する一審被告に対し、異なる見解を有する渡辺満久教授を尋問し、確かめる必要がある旨反論する意見書を提出しました。

2 一審被告は、裁判例を引用しつつ、避難計画の不備から直ちに近隣住民の生命身体に対する具体的権が生じるわけではなく、あくまで原発事故に起因する危険によつて近隣住民の人格権が侵害される蓋然性があるかを検討しなければならぬと主張するとともに、原子力防災法及び原子力災害対策基本指針に基づき、実効性ある避難計画が策定されているとの主張をする準備書面(13)を提出しました。右書面の中で、あわせて、女川原発差止請求訴訟控訴審判決を踏まえた原告第8準備書面に対する反論を行いました。

一審原告意見陳述

一審原告の意見陳述は、守屋敬正さんが行いました。

ご自身の両下肢の障碍を例に、災害時に何らの具体的な備えもなく実効性のある避難をすることは到底できないと考えられる旨指摘しつつ、能登半島沖地震で断層が4メートルも隆起した事実などを素直に捉えて原発の審査を行うべきことや、原発で働く人の健康リスクのもとで原発が稼働していることは人間の冒険である旨訴え、100年後200年後の未来

を考えたときに、人間の手に余る事柄から手を引くことが未来の世代に対する最大の貢献であることを主張し、廃炉を訴えました。

次回期日に向けた準備等

一審原告は、避難防災に関する追加の主張を行うとともに、関連する証人尋問の申請を次回期日までに行うこととなりました。

一審被告は、原告第7準備書面に対し反論することになりました。また、海底活断層の存在に関する追加意見書の提出予定がある旨明らかにしました。

渡辺教授の尋問は不採用とされてしまったものの、判決に向けて着実に進んでいますので、引き続き廃炉に向けて訴訟活動を積み重ねていく所存です。

今後の予定等

次回期日は、令和8年4月8日(水)午後2時30分から、次々回期日は令和8年8月26日(水)午後2時30分からです。

道知事の再稼働容認をうけて関心が高まっていることと思いますが、次回もたくさんの方に傍聴においでいただき、ともに廃炉への意志を表明していきたいでしょう。

(文責) 佐々木 泰平